

「仙台市確かな学力育成プラン 2023」中間案に関するパブリックコメントで寄せられた意見と本市教育委員会の考え方について

| No. | 項目 | 意見（概要） | 本市教育委員会の考え方 |
|-----|-----------------|---|---|
| 1 | 第2章 学力をめぐる現状と課題 | 人口の捉え方について。ピーク時の2008年との比較としてあるが、現プランの2018年か現在の2022年を基準とした表記が理解し易いのではないのでしょうか。 また、その背景にある人口減少にどれほどの意味があるのかを考えると、それ以上に地域による就学人口の偏りが多く見られることと学区の考え方に曖昧さも感じられるところです。「地域」との協働を掲げているコミュニティ・スクールの推進から見ても自由な学区の選択も含め、再検討が必要ではないのでしょうか。 | 本市の学校教育活動のすべての基盤である、地域とともに歩む学校をより一層進める仕組みがコミュニティ・スクールです。学区編成が複雑な中学校区や学校規模等で課題もありますが、学校と地域の連携・協働を進め、学校を核とした地域づくりにつながるよう努めてまいります。 |
| 2 | | 前プランでは、状況分析として「少子化が進行する中で、地域での異年齢集団が形成されにくくなり、子供たちに社会性を身に付けるきっかけとなる友情、葛藤、対立、忍耐を経験する機会が減少することが心配される。また、少ない子供を大切に育てよう意識することから、親の子供に対する過保護・過干渉の傾向が生じ、子供が自ら考えたり、自ら試行錯誤しようとする機会を奪ったりする傾向が出てくるのが心配される。」という記述がありました。重要な分析であり、状況認識に変更がないのであれば、引き続き記載する必要があると考えます。 | 前プランで記載した状況の懸念も継続しているものと推察していますが、本プランの策定については、喫緊の教育環境を取り巻く状況として、「家庭の状況変化」についての記載としております。 |
| 3 | | 「学校が抱える課題が複雑化・多様化している」「学校に求められる役割が大きくなり、教師に負担がかかっている」「献身的教師像を前提とした学校の組織体制では、質の高い学校教育を持続発展させることは困難」と書いてあるが、それを改善する案が示されていない。ビルドアンドスクラップのスクラップが必要。例えば、いじめアンケートの簡略化、復興プロジェクトの見直し（折り鶴づくり）、陸上記録会廃止、朝の健康チェック廃止、就学時健康診断は民間や市民センター診断にする、プール管理や校内の清掃の外部委託など、教師の負担を軽減する取組を議論し、何かしら実施していただきたい。 | 本市では、令和4年度に「働き方改革 令和4年度～令和6年度 取扱指針」を策定し、働き方改革に取り組んでおり、学校と連携しながら、その推進に努めております。児童生徒に対して効果的で生き生きとした学校教育を行っていくためには、教員がワーク・ライフ・バランスを保ちながら自身の資質・能力の向上に取り組めるようにすることが大切であると認識しています。 |
| 4 | | 今、若年層の多くは地域社会の関心に薄さを感じているのではないかと。個人としての充実した生活への関心は強いものの地域のみならず社会全体への関心は弱いようにも感じます。 18歳の選挙権の行使の実態を見ても他人事のように感じているのではと思います。2030年には現プランの対象の子どもたちは成人して社会を支える立場となっている人たちがいると思います。そんな時「自分」だけで良いのか問われます。 「確かな学力」として表現している内容には全体として評価しますが、上記にもありますが、「個人」と「社会」の在り方をバランスよく見ていくことのできる「目」を養っていく方向は大切にしたいと思えます。職場としての教員の在り方も大切に。 | 今回の改訂に当たっては、特に、非認知的な部分にも目を向け、成長を促していこうとしています。策定の過程においても、同様の議論がなされ、A「仙台自分づくり教育の充実」、E「家庭や地域との連携・協働」の観点を生かし、たくましく生きる力をしっかりと育ていけるよう努めてまいります。 |
| 5 | | 「3. 本市児童生徒の学力・生活習慣等の現状」16行目に社会がないのはなぜか。 | 記載の内容は、全国学力・学習状況調査の実施内容であり、当該調査の社会は実施されていないためです。 |
| 6 | | 図1で小6はH30～R4で80%から60%にダウンしているが、これについての考察が次ページで触れられていない。 | 年度ごとの変化については、母集団が変わってくるため、ここでは全体的な状況確認の考察をしております。 |

| No. | 項目 | 意見（概要） | 本市教育委員会の考え方 |
|-----|-----------------|--|---|
| 7 | 第2章 学力をめぐる現状と課題 | 前プラン策定時パブリックコメントにおいて、学力向上と子どもの遊び経験の関連について分析することを提案したところ、「コミュニケーション力、人間関係調整力等は、子供たちの生活、とりわけ遊びの中で育まれるところが大きいものと考えます。仙台市生活・学習状況調査では、「放課後や休みの日に、外で遊んでいる。」（小学2～4年生の調査）の項目があり、今後、学力との関係の分析を検討してまいります。」との「教育委員会の考え方」が示されました。本中間案では、そうした分析の結果が見られませんが、必要ではないでしょうか。メディアへの過剰な接触を危惧する記述もありますが、その点にも大きく関わるものと思います。 | 子どもたちの遊びの経験が、コミュニケーション力や創造力を育む上で大切な要素の一つであると認識しておりますが、現在のところ、遊びの経験と学力との直接の相関関係は明確には見えておりません。 |
| 8 | | 前プランパブコメへの教育委員会の考え方で、「仙台市生活・学習状況調査の「放課後や休みの日に、外で遊んでいる。」（小学2～4年生の調査）の項目と学力や生活・学習習慣との関係について、東北大学加齢医学研究所と共同による分析について検討してまいりたいと考えています。」とありました。分析は行ったでしょうか？まだなら、実施すべきと考えます。 | |
| 9 | | 図17で、学年別だとH30からR4で明らかに減少傾向にあることが触れられていない（学年別にデータの数値をそれぞれ縦方向↑のように下から見る）。 | 令和4年度の結果と過去5年の割合を比べた傾向について記載いたします。 |
| 10 | | Ⅱ-2-③ 幼児期からの切れ目のない教育の推進で、学校間の連携には限度があるため、小中学校の統廃合を進め、9年間の小・中一貫での教育という方向へ舵を切った方が良いのではないかと。 | 小中学校間の指導の連続性や校種間の円滑な接続を進めていくことで、子どもたちにとって学校生活のスムーズな接続や教職員の相互理解の促進による教育力の向上が図られるよう取り組んでまいります。 |
| 11 | | 幼児教育期からの切れ目のない連携で幼・保・小の連携強化はわかります。小・中の連携もよく分かります。小学校入学後の子ども理解の連携先に「なぜ、児童館が明記されていないのか」が疑問です。児童クラブに登録している児童については特にそうです。支援を要する児童の理解についても同じことが言えます。教育と福祉は別物？なのか…。 明文化することで学校側が認識することが大切かと思いました。（このことは当方が児童館を指定管理し、市内の児童館がほぼ感じていることが分かりました。）切れ目のない、誰一人取り残さないことを大切にしたい教育を本市が目指していると認識しているからです。保護者理解にも共有は大事だと思います。 | 子どもたちに「生きる力」を育む上で、様々な関係機関と連携し、協働して取り組むことは大変重要なことであると認識しております。地域総ぐるみでの教育体制の充実を図る中で、児童館や児童クラブとも連携をしていけるよう検討していきたいと考えます。 |
| 12 | | 仙台市幼児教育の指針の基本理念にも「幼児期の子どもにとって、日々の生活や遊びは大切な学びの場です。」と記載されておりました。本計画で遊びを学びとらえ、幼児期に体験してきた遊びを通した学びと小学校での教育を連続的に行うことが意識されているのは、重要な視点だと思います。 小学校教育においても、遊びの中に学びがあるという視点を、よりしっかり位置付けてはいかでしょうか。 | 本プランでは、幼保小連携事業の中で、児童が幼児期に体験してきた遊び的要素と小学校での教科学習の要素の両方を組み合わせた学習プログラムであるスタートカリキュラムについて示しております。幼保小がねらいや連続性について理解し進められるよう取り組んでまいります。 |

| No. | 項目 | 意見（概要） | 本市教育委員会の考え方 |
|-----|---------------------------------|--|--|
| 13 | 第2章 学力をめぐる現状と課題 | 本計画では遊びを通した学びの重要性が認識されているが、幼稚園・保育園の中にはそうした認識が不足し、「早期教育」に傾斜し過ぎていると感じられる園が散見される。幼児期に非認知能力を高めておくことが重要とも言われており、幼稚園・保育園や地域にもそのことを伝えていくことが必要だと考える。 | 幼児教育については「仙台市幼児教育の指針」（子供未来局）の基本方針で、幼児期における非認知能力の育成が「たくましく生きる力」の基礎となることと示しています。本プランでは、その指針を踏まえつつ、幼稚園、保育所等と小学校の更なる連携を進めるとともに、小学校への円滑な接続を進めてまいります。 |
| 14 | 第3章「仙台市確かな学力育成プラン2023」における基本的方向 | 子供たちが夢を持ってない、将来を描けないということばかりが問題視され過ぎていると感じる。そのため、職場体験や職業講話などの取組ばかりに重点が置かれている。夢を持ってない、将来を描けないのは、普通のことである。子供たちは今を生きている。私が生きていた小学生時代に、具体的な夢や目標を持っていた子は極わずかである。ゆえに、今どう生きるか・・・「どういう役割を果たしたいか・果たしたか」「次の行事でどんな自分になりたいか」など、そのときそのときに自分の役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが大切であり、それがキャリア形成につながっていく。（文部科学省 HP より第1節 キャリア教育の必要性と意義（その1）（mext.go.jp）p15） 仙台自分づくり教育は、この「自己実現・役割を果たす」面の取組が薄い。キャリア・パスポートの活用では、この面に触れるべきであるし、将来についてだけでなく、今の自己実現についても見直せるような体験があるとよい。自己実現したり役割を果たしたりすることを積み重ねることによって、自己肯定感・自己有用感が生まれ、将来も展望できるようになると考える。 | 自己実現や役割を果たす経験は、子どもたちの成長に欠かせないものであると認識しております。たくましく生きる力をバランスよく育むために、学校、地域・家庭とも連携しながら、子どもたちの実情や課題を踏まえ、様々な自分づくり教育を進めていくことで、子どもたちの自己肯定感・自己有用感を高められるように努めてまいります。 |
| 15 | | 「夢をかなえられなくても幸せに生活している人はたくさんいる」「夢は変わってもいい」のならば、「夢をもつことの大切さ」をそこまで強調すべきではないのではないかと。 「夢をもってそれに向かって努力する」のは確かに大切ではあるが、これは自分中心の面が強く表れるため、それよりも「人の役に立つ」「人々の暮らしを守る」といった、社会の中で生きていく1人として、他者への思いやりを育むような面を強調したキャリア教育の方が必要ではないかと。また、キャリア教育に関して、職業適性に関する教育・指導はどの程度行われているのか。ホランド理論に基づいた職業適性検査のようなものは実施しているのか。やりたいことが分からない児童生徒でも、自分自身の適性から、将来のことを考えていききっかけになると思うので、実施していなければ、ぜひやってほしい。 | 人と人がコミュニケーションを育む上で、他者への思いやりも大切であると認識しており、様々な教育活動を通して、育んでいけるよう取り組んでまいりたいと考えております。 職業適性検査については、キャリア形成の段階によって必要となる時期もあると認識しておりますが、小中学校では、たくましく生きる力の育成を通して、自分自身を見つめ、自分の良さを伸ばしたり、目標を達成するよう努力したりすることの意味を実感していくことも大切であり、それが将来の職業選択にもつながっていくものと考えております。 |

| No. | 項目 | 意見（概要） | 本市教育委員会の考え方 |
|-----|---------------------------------|--|--|
| 16 | 第3章「仙台市確かな学力育成プラン2023」における基本的方向 | 現場が求めているのは、単発の授業だけではなく、「自分づくり教育をどうカリキュラムに落とし込んで、単元や年間を通して位置づけていくのか」という視点である。「たくましく生き」の授業を実践しても、もともとの身に付けさせたい力の吟味が不十分なために、つながりが生まれず教育的効果も低くなった経験がある。 自分づくり教育を推進していくためには、身に付けさせたい重点指導項目の確認や系統性の確認、行事・教科（特に総合・特別活動・道徳）との横断、時間配分などをよく練って、カリキュラムに落とし込むことが必要である。これはなかなか骨の折れる作業である。したがって、学校に根付いていない。1年間を通して、どのように自分づくり教育を実践していけばよいか、そのカリキュラムプラン集のほうこそ、「たくましく生きる力育成プログラム」なのではないか。 | 子どもたちの現状や課題を踏まえ、身に付けさせたい資質・能力を分析することは、とても大切です。「たくましく生きる力育成プログラム」は、各教科、特別活動、道徳、総合的な学習の時間の中で実践していくことになり、どの内容をどの時間で実践すると効果的かということは、「関連教科」として授業プランに例示しています。また、自分づくり教育の全体計画や年間指導計画への位置付けについても例示しており、子どもたちの実態に応じた授業プランで、育てたい力を明確にして、計画的に実践していくことが大切と考えております。 各学校の取組について研修機会を設けるなど周知の方法を検討してまいります。 |
| 17 | | 教員の質的向上も引き続き考えていくことですが、教員の皆さんには学校以外の社会から学ぶ意識を持っていただきたい。内部研修や教育の専門家（大学等）だけでなく、社会の力をもっと活用してもいいのになあ、と思っています。 | 教員が広い視野を持つためには、様々な立場の方から話を聞くことも大切であると認識しております。本市の教員の研修では、教育以外の立場の講師から研修を受ける機会もあります。また、学校運営協議会の中で、地域の方から学ぶことも意識するよう取り組んでまいりたいと考えております。他にも社会から学ぶ機会をつくっていただけるよう検討していきたいと考えます。 |
| 18 | | 学力サポートコーディネーターは退職した校長・教員が中心だが、ICTの活用分野に強いのか疑問がある | ICTを活用した授業づくりにも取り組んでおり、ICT活用も含めた教員の教科指導力の向上及び授業の質の向上を図っております。 |
| 19 | | ICT活用は「個別最適な学び」にも資するものであり、C「きめ細かな指導の充実」の中でも触れる必要があると考える。 | ICTの活用は確かな学力の育成には欠かせないものであると考えております。本プランのどの領域にも関わるものであると理解して、各領域の始めのページにICTの活用を意識した取組について追記しました。 |
| 20 | | 小中ギャップのや中1ギャップについて、定義が明確ではないのではないかと。国立教育政策研究所では、『中1ギャップ』という語に明確な定義はなく、その前提となっている事実認識も客観的事実とは言い切れない。」と発表している。記載の内容も問題行動等に限った話ではないことから、安易に「中1ギャップ」や「小中ギャップ」を使用しない方がよいのではないかと。 | 記載の内容は、小学校から中学校への学習や学校生活のスムーズな接続を意図したものでした。その意図が伝わるよう修正いたします。 |

| No. | 項目 | 意見（概要） | 本市教育委員会の考え方 |
|-----|---------------------------------|---|--|
| 21 | 第3章「仙台市確かな学力育成プラン2023」における基本的方向 | <p>不登校児童、教室に入るのが困難な児童の存在にも目を向けてほしい。</p> <p>私は拠点校指導教員として、2つの学校に勤務しているが、どちらの学校にも、教室に入れずに別室で過ごす子供たちがいる。5人～10人ずつくらいである。程度・実態は様々であり、「一日の半分は教室、半分は職員室」のような子もいれば、ずっと保健室にいたという子もいる。時に、教務主任・教頭・校長までもがその子供たちの対応に当たっている。これでは、健全な学校運営ができないのは言うまでもない。その子供たちが、教室に入れない理由は様々あるが、共通して言えることは、「学校が組織として実態に対応できていない」ということだ。その子供たちに合う指導ができていないのである。それを、市はどう判断するのだろうか。</p> <p>きめ細かな指導を掲げるのであれば、このような子供たちをしっかりと見取り、指導できるシステムをつくってほしい。やはり、人材が複数必要になると考える。ここにお金を掛けて欲しい。</p> | <p>本市としても「不登校児童生徒等への支援」や「教育相談体制の充実」を進めております。また、本プランの施策の中にも、不登校児童生徒の支援に関わる取組を示しております。すべての子どもたちの可能性を広げるために、様々な取組を進めてまいります。</p> |
| 22 | | <p>算数・数学における学習支援事業支援員を年間200名前後配置には驚いた。</p> <p>プロである先生が上手に教えられなくて支援を依頼することにはプライドに関わることと思われまます。入試の成否も思考の基も数学は最重点教科と思われまます。自分の経験から「幾何」を学ぶことが具体的に可視できて理解できる最善の方法と思われまます。</p> | <p>算数・数学における学習支援事業は、児童・生徒のつまづきによる学習意欲の低下を防ぐため、学習内容の確実な定着を図り、実態に応じたきめ細かな指導ができることをねらいとして進めております。また、「思考力」については、本プランにでも、確かな学力の要素の一つを、「活用する力」として、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」と示しております。その能力も育成していくことで、確かな学力を確実に身に付けられるようにしていきます。</p> |
| 23 | | <p>プラン策定時パブリックコメントにおいて、「家庭や地域の教育環境の充実」に関連して、「学習意欲の向上には、学校の授業の時間とは別のところで豊かに遊ぶことを通して興味・意欲を育てていくことが重要と思われる。…学力向上の土台をつくるためにこそ、学校外では遊ぶことも大切だ、ということを目指すべきではないか。これはまた、自己肯定感・自己有用感の向上にもつながるものと思われる。」との意見に対し、「仙台市生活・学習状況調査の「放課後や休みの日に、外で遊んでいる。」（小学2～4年生の調査）の項目と学力や生活・学習習慣との関係とともに、併せて、自己肯定感・自己有用感との関わりについて、分析の検討を行ってまいります。」との「教育委員会の考え方」が示されました。分析の結果関係がなかったということだったのでなければ、一度はしっかりと分析し、その上で家庭や地域の教育環境づくりの視点としても、入れていく必要があるかと考えまます。</p> <p>「すこやか子育てプラン2020」においても、基本施策に「遊びの環境の充実」が掲げられるようになった今、本構想においても、＜取り組み方針＞に、「〇子どもは日常生活や遊びの中で「やってみよう」という意欲や態度を育み、様々な体験や身近な人々とのかかわりを通して、人格形成の基礎を培うことから、遊びの環境の充実に向けた取組を進めます。」といった記述を入れることを提案しまます。</p> | <p>遊びと自己肯定感・自己有用感との相関についても見ておりますが、「外遊びの経験」と「自分には良いところがある」という質問の相関については、若干の有意性が認められる可能性があるものの、現時点でははっきりとしておりません。</p> |

| No. | 項目 | 意見（概要） | 本市教育委員会の考え方 |
|-----|---------------------------------|--|--|
| 24 | 第3章「仙台市確かな学力育成プラン2023」における基本的方向 | 「これまでの取組」で「啓発してきました」とのことだが、啓発してきた結果が、昨今の学習意欲や生活習慣、学習習慣の実態である。調査の結果などに書いてあるように、課題がたくさんある。したがって、「パンフレット配付」「HP掲載」など、従来の啓発の仕方を変える必要があると私は感じている。 今の時代に合わせていくのがよいと考える。例えば、Twitterの仙台市教育委員会の公式アカウントを作り、保護者にフォローしてもらい、定期的に啓発メッセージを送るというのはどうだろう。メーリングリストのマガジン配信、ラインでの配信なども考えられる。学校を経由しなくていいので、即時制があり、学校の負担も減る。また、現代の親世代の指向に合わせてられるのがメリットである。 | より効果的な方法について検討し、家庭への啓発・周知に努めてまいります。 |
| 25 | | コミュニティ・スクール化は「地域と共に歩む学校」の真価が問われるものと思っております。市民側にも裁量権があるということと捉えているのですが、学校側の認識は如何なのでしょう。気が付くと形骸化してしまうのでは…とってしまう。CSが学校にとってメリットになることを引き続き話していく必要があるのではと思いません。「学校を一人にしない」「学校だけで抱え込まない」がとても大事ですよね。 | コミュニティ・スクールが、学校・地域・家庭が一体となって、子どもたちの豊かな成長のために効果的な取組ができるよう、先進的な学校の活動を広めるなど、委員会としても継続的に支えていきたいと考えております。 |
| 26 | | コロナ禍によって、子どもの年齢に応じた発達は停滞している。コミュニケーションおよび体力不足（運動能力の低下）、体験不足、行き過ぎたメディア機器接触など子どもの環境が芳しくない今、本来子どもが持つ力を如何に仙台市民総ぐるみで引き出していけるのか。確かな学力を支える根本を市教委は声を高めて市民に伝えてほしい。もちろん子どもと大人がwinwinで語ることも求められると思います。 | 学校・地域・家庭がしっかりと連携し、協働して子どもたちの教育活動を育んでいけるよう、啓発・周知に努めてまいります。 |
| 27 | その他 | 各小学校では、校長の裁量により遊び場開放事業が実施できることになっているが、現状では、かなり限定的な運用になっていると見られます。 放課後等に屋外で遊べる環境の確保は、さまざまな点で、学力形成とも関連するものと考えられます。そのような視点で、遊び場開放事業の積極的推進をあらためて検討し、計画にも記載してはいかかでしょうか。 | 遊び場解放につきましては、本市では、学校施設開放事業の一つとして、生涯学習事業の中で実施しているところであり、引き続き、当該事業の枠組みの中で学校や地域の実情に応じた推進を図ってまいります。 |